資料２－８

災害教訓の継承に関する専門調査会報告書原案

「1890 エルトゥールル号事件」

【災害教訓の継承に関する専門調査会】エルトゥールル号分科会

報 告 書 原 案

＜文責：三沢伸生＞

以下は素案であって、分科会内における役割、分担、計画などについては今後協議するものとする。 →全体会方針に従い、必要があれば素案に基づき適当な委員の増員をはかる （気象情報については、市澤委員の御参加・執筆を依頼すること決定） 下記のようにノルマントン号事件、マリア・ルース号事件など他の海難事故との比較を考慮すればその専門家の増員を協議する必要性もあり。 →全体会方針に従い、平成16年度末までに報告書の完成を目指す（→出版？） →実地調査としては、災害現場（和歌山県）あるいは生存者救護施設（兵庫県神戸市）が候補か？マリア・ルース号事件の場合も考慮し、実地調査は協議のうえ時期･場所・派遣員を決定。

１章：どのような災害であったのか

＊ 災害の発生期日・時刻：1890（明治23）年9月16日　午後４時頃（あるいは午後９時過ぎ？）

＊ 災害の発生場所：和歌山県大島近郊（訪日日程を終えてオスマン帝国へ帰還途上）

＊ 災害要因の規模：オスマン帝国軍艦エルトゥールル号の座礁・大破

＊ 災害要因のメカニズムの特徴：台風の影響を受けて座礁（台風で航行不能→座礁→大破・沈没）

→和歌山県沖で同種の事件が繰り返し起こっていることも重要

（災害教訓は生かされないのか？）

＊ 災害の影響を受けた地域の範囲：

＊ 全体的な被害：エルトゥールル号は大破・沈没

→同船の乗員（全てトルコ人）の90%前後、500名以上が死亡

（コレラ禍で帰国時の乗員数が不正確で確定し得ない）

【500名を越す外国人被害者。災害における外国人問題として重要】

阿部先生より、「マリア・ルース号事件」（1872年）と「ノルマントン号事件」（1886年）との比較は必要との指摘

→全体会でも指摘を受けたので、最低限上記2事件との比較を行う。

災害教訓という主題を日本人だけの視点に限定しないためにも重要か？

＊ 国、地方政府の対応：

宮内庁　：天皇に上奏、侍医や赤十字社要員などを神戸に派遣、生存者本国送致の決定　宮内大臣：土方久元

外務省　：オスマン帝国への連絡、神戸への要員派遣、ロシアとの交渉、比叡に外務省役人の乗船（オスマン帝国における市場調査）　外務大臣：青木周蔵

内務省　：詳細不明（海軍省の資料からは痕跡をうかがえない）内務大臣：西郷従道

海軍省　：救済の為に大島へ軍艦八重山の派遣

生存者本国送還の為に軍艦比叡・金剛の派遣　海軍大臣：樺山資紀

兵庫県　：東京に打電、ドイツ軍艦との連絡、病院の手配

和歌山県：東京に打電、事故現場に役人派遣、死者埋葬の手伝い、慰霊碑建立

２章：災害に関する一般的な事項について

１節：時代背景、行政、防災体制はどのようなものであったのか

（１）社会経済情勢・国民生活環境等

・日本とオスマン帝国との間には国交が樹立していない。

→双方にとって遠い異世界（関心は希薄）

→大アジア主義の萌芽期であるが、アジアとしての連帯感は希薄

・経済情勢：芳しくない

・国民生活環境：コレラの蔓延（防災体制の未成熟？）

（２）中央・政府を通じた行政体制と防災に係る組織体系・制度等

・台風、座礁などの事故災害に対する行政体制→？【←気象台の前日の天気図の提供】

→「ノルマントン号事件」（1886 年）の教訓は生かされず

（ほぼ同じ場所であったにもかかわらず事故の再発）

→地方から中央への災害の連絡システム（とりあえず東京へ？）

→中央政府の省庁間の連絡体制の未整備（？）

（天皇＝宮内庁、外務省、海軍省、内務省の役割は？）

→赤十字社の対応未整備（？）

生存者送還までに記録を整理しきれなかった要員の自殺未遂

・訪日外国人使節の事故災害に対する行政体制（→恐らく未整備）

→外務省の対応（オスマン帝国への打電）

（３）地域社会における災害への事前の備えや発災時の対応手段

・事前対応は不詳（ノルマントン号事件後の対応は？）

・発災時の対応は村長を中心に組織

（４）社会的影響の強い組織と防災との係り

・事故現場の大島村長（沖周）の迅速な対応

→生存者・死者の探索

【<u>※資料として災害教訓遺産として『沖日記』（トルコ記念館蔵）が重要</u>】

・現場の小学校が生存者の収容施設に

・現場の医師の献身的対応

・マスコミ（新聞社・雑誌社）による世論形成、義捐金募集活動

・赤十字社の機能

（5）社会インフラと自然観測技術の状況

・通信網の未整備（事件発生から１日以上かかって東京に連絡）

・東海道線の開通（事故発生後の政府要員・赤十字要員等の派遣）

2節：災害の被害はどのようなものであったのか

（1）被害の特徴：

台風のため航行の自由を喪失。船甲羅という岩礁に乗り上げて座礁し、水を被った蒸気機関が爆発、90 分で大破、沈没。

＜風水害としての台風と、海難事故の両面を有する＞

（2）人的被害や物的被害の特徴：

・人的被害：乗員数が不確定ながら、500 名以上が死亡。69 名のみ救出。

・物的被害：エルトゥールル号は大破・沈没

（3）社会経済への影響：

・社会への影響：

新聞報道を通してオスマン帝国への同情が喚起

対応策の不手際、条約改正への利用を考えてヨーロッパへの対抗心の喚起

・経済への影響：

財政難であるが、２隻の軍艦派遣のため予備金から 126,487 円 60 銭支出

（4）政府・権力への影響

・宮内庁：事件を契機とした親善

・外務省：新聞の糾弾により態度硬化。国交樹立を目的としない経済調査へ

・海軍省：軍艦２隻を練習航海に兼ねて生存者送還にあてる

3節：災害に対してどのような応急・復旧対応が行われ、どのような効果があったのか

（1）応急・復旧対応策の特徴：

・生存者の救出を最優先

（2）中央政府による対応策

・宮内庁→海軍省　　生存者救出のために軍艦八重山の派遣

・宮内庁　　式部官・侍医などを神戸へ派遣
・宮内庁→赤十字社　医員・看護婦を神戸へ派遣
・外務省　　交際官試補１名を神戸へ派遣
　　オスマン帝国へ打電
・内務省　　不明

（3）地方政府による対応策
・和歌山県：　中央政府へ打電（→指示を仰ぐ）
　　事件現場への県庁役人派遣
・兵庫県　：　中央政府へ打電（→指示を仰ぐ）
　　救出に向かうドイツ艦に役人同乗
　　生存者看護体制の整備

（4）被災地域住民による対応策
・生存者の救出と看護
・死者の埋葬
・備品の回収

（5）その他社会的影響力の強い組織による対応策
・新聞社により事件報道（→海難事故にかんする注意喚起）
　→東京、神戸で号外が刷られ、大阪でも欄外記事で第一報
　→新聞情報は、情報の伝播・変化を知るうえで重要
　　東京の大新聞
　　大阪の大新聞
　　神戸・和歌山の地元新聞　『神戸又新日報』
　　日本中の中小地方新聞
　　横浜・神戸の外国語新聞
　　外国メディアとの比較
　　（正しい情報が伝播するのか？誤った情報が伝播するのか？）
・生存者の救出は日本軍艦ではなく神戸停泊中のドイツ軍艦による
　→対応の早さ（軍艦八重山は出航に手間取る）
　→神戸在住ルーマニア人が通訳に雇われる

（6）ボランティアや義捐金等による支援
・ボランティア：民間船による神戸への事件連絡
　　民間の潜水業者が死者の探索に協力
・義捐金　　：新聞社・個人の義捐金募集活動の開始

（7）応急・復旧対応策の効果
・生存者救済は成功

・死者のほとんどが引き上げられ埋葬
・中央政府の混乱（指揮系統の未成熟？）

4節：災害後にどのような復興対応が行われ、どのような効果があったのか

（1）復興対応策の特徴
・生存者送還：日本軍艦２隻を派遣
・事故対策　：特になし（？）

（2）中央政府による対応策
・生存者送還問題
・事故対策

（3）地方政府による対応策
・和歌山県：事故対策は特になし（？）
慰霊碑の建立（→義捐金の募集）
・兵庫県　：生存者の看護問題

（4）被災地域住民による対応策
・死者および沈没物品の回収
・事故対策は特になし（？）

（5）その他社会的影響力の強い組織による対応策
・ロシアが生存者送還を外務省に打診
→新聞社を通して世論の反発

（6）ボランティアや義捐金等による支援
・ボランティア：大島における死者および沈没物品の回収
・義捐金　　：新聞社・個人の義捐金募集活動の発展

（7）復興対応策の効果
・海難事故に対する復興対応策：不明
・生存者送還：日本軍艦２隻の派遣

5節：災害はどのような社会変革をもたらしたのか

（1）政治・行政体制や法制度の変革
・政治・行政体制：中央政府の連絡網は変化せず
外交政策は変化せず（国交樹立を急がない）
・法制度　　：変化なし（？）

（2）経済・財政システムの変更
・経済システム：外務省によるオスマン帝国の市場調査
・財政システム：生存者送還に国庫予備金の使用（財政負担）

（3）国民生活や被災地域住民のくらしの変化

・国民生活：一時的なオスマン帝国（イスラーム世界）への関心昂揚

→短期間で終焉。継続せず。

→日本とオスマン帝国とは国交を結ばず、1923年になってローザンヌ条約

→事件が両国友好の象徴として語られ出したのは、ずっと後世のこと（第２世界大戦後）

・被災地域住民：オスマン帝国より勲章の授与

→後世になってトルコとの姉妹都市提携

串本町との提携Yakakent（1964年）、Mersin（1975年）

６節：災害に関してどのような伝承があるのか

（1）災害に関する伝承の紹介

・日本側　：歌（→参考資料の内藤智秀の本に再録）

・トルコ側：悲劇として伝承（→日本とトルコの友好の起点）

（2）伝承による防災の知恵

・不明

（3）その他

３章：災害種別特有の事項について

１節：災害に関する詳細事項

２節：過去の同種災害の発生状況、その後の措置、効果等

【→要検討：他の部会との連携】

災害概略シート

【→要検討：他の部会との連携】

付録：参考文献・資料等データ　【→現段階まで、後に増補・改訂を】

（1）引用した参考文献・資料一覧

＜１次資料＞

小椋元吉・松村龍雄『軍艦比叡土耳古國航海報告』東京：水路部、1892年。

藤戸永綱・磯部謙次郎『軍艦比叡土耳古國航海報告』東京：水路部、1892年。

大山鷹之介『土耳其航海記事』東京：大山鷹之介、1892年。

山樵亭主人『新月山田寅次郎』大阪：岩崎輝彦（私家版）、1952年

山田寅次郎『土耳古画観』博文館、1911年。

Michael Penn (tr.), “Shotaro Noda’s Chronicle of the Japanese Warships Bound for Turkey Part One: The Departure from Japan”, 『北九州市立大学法政論集』29巻1/2号、2001年、298-316頁。

Michael Penn (tr.), “Shotaro Noda’s Chronicle of the Japanese Warships Bound for Turkey Part Two: Hong Kong”, 『北九州市立大学法政論集』29巻3/4号、2002年、357-77頁。

＜研究＞
【日本語】
セルチュク・エセンベル「世紀末イスタンブルの日本人」『近代日本とトルコ世界』（池井優・坂本勉:編）頸草書房，1999 年，
小松香織「アブデユル・ハミト二世と19 世紀末のオスマン帝国」『史学雑誌』98-9，1989年，40-41 頁。
白岩一彦「明治期の文献に見る日本人のトルコ観」『近代日本とトルコ世界』（池井優・坂本勉編）勁草書房，1999年，3-41 頁
内藤智秀『日土交渉史』泉書院，1931 年。
長場紘「山田寅次郎の軌跡：日本・トルコ関係史の一側面」『上智アジア学』14 号，1996年、頁。
波多野勝「エルトゥールル号事件をめぐる日土関係」『近代日本とトルコ世界』（池井優・坂本勉編）勁草書房，1999年，43-69 頁。
三沢伸生「オスマン朝と日本の関係：山田寅次郎の事績の検証(1)」『イスラーム社会におけるムスリムと非ムスリムの政治対立と文化摩擦に関する比較研究』[札幌：北海道大学]、2001年、216-226 頁
三沢伸生「1890 年におけるオスマン朝への日本軍艦比叡・金剛の派遣：エルトゥールル号遭難に対する日本社会の反応」『東洋大学社会学部紀要』39-2，2001[2002]年，55-78 頁。
三沢伸生「1890 年におけるオスマン朝に対する日本の義捐金募集活動：「エルトゥールル号事件」の義捐金と日本社会」『東洋大学社会学部紀要』40-1，2002 年，77-105 頁。
三沢伸生「明治時代にオスマン帝国へと渡った日本人：野田正太郎と山田寅次郎」『日本—トルコ友好史展：アジアの西と東を結ぶ19 世紀のロマン』東京：キュレイターズ、2003 年、38-47 頁。
三沢伸生「1890? 92 年におけるオスマン朝に対する日本の義捐金処理活動：日本社会にとっての「エルトゥールル号事件」の終結」『東洋大学社会学部紀要』41-1，2003 年，57-91 頁。
森修（編著）『トルコ軍艦エルトゥールル号の遭難』日本トルコ協会，1990年。
「寅次郎奔る：日本と土耳古を結んだ快男児」『上州風』14, 2003年, 1-49 頁。
【英語】
Nobuo MISAWA “ Relations between Japan and the Ottoman Empire in the 19th Century : Japanese Public Opinion about the Disaster of the Ottoman Battleship *Ertugrul* (1890) ”，『日本中東学会年報』18-2, 2003 年, pp.9-19.
【トルコ語】
Cetinkaya APATAY, *Ertugrul Firkateyni'nin Oykusu,* Istanbul, 1998.
Canan ERONAT(ed.), *Ertugrul Suvarisi Ali Bey'den Ayse Hanim'a Mektuplar*, Istanbul, 1995..
Arif Hikmet Fevzi ILGAZ, Hasene ILGAZ, *Ertugrul Firkateyni*, Istanbul, 1990.
Kaori KOMATSU（小松香織）“ 100'uncu Yildonumu Munasebetiyle <Ertugrul Firkateyni> Faciasi, ” 『日本中東学会年報』5, 1990, 113-172 頁。
Kaori KOMATSU（小松香織）*Ertugrul Faciasi : bir dostlugun dogusu*, Ankara, 1992.
Erol MUTERCIMLER, Mim Kemal OKE, *Ertugrul Firkateyni Faciasi*, Istanbul, 1991.
Erol MUTERCIMLER, *Ertugrul Faciasi*, Istanbul, 1993.
Osman ONDES, *Ertugrul Firkateyni Faciasi*, Istanbul, 1998 (2d.ed.).
Sahin, F.Sayan, “Ertugrul Faciasi Sehitlerinin Aileleri icin Girit Vilayeti'nde Toplanan Yardimi”, *Turk Dunyasi Arastirmalari Dergisi,* 105, 1996, pp. 99-152.

Sahin, F.Sayan, “Ertugrul Faciasi Sehitlerinin Aileleri icin Ulkede Toplanan Yardimi”, *Turk Dunyasi Arastirmalari Dergisi,*112, 1998, pp.

Sayan ULUSAN SAHIN, *Turk-Japon Iliskileri (1876-1908),*Ankara, 2001

（２） 当該災害に詳しい歴史資料館や博物館の紹介

・日本　：トルコ記念館（和歌山県串本町）

防衛研究所図書館（東京都目黒区）→主に海軍関係史料

外交史料館（東京都千代田区）→主に外交関係史料

当時の新聞を所蔵する国内の諸図書館

→神戸、兵庫の施設については内閣府から調査？

・トルコ：海軍博物館（イスタンブル）

当時の新聞を所蔵する国内の諸図書館

（３） 写真等

・日本　：（１）であげた一次資料内

トルコ記念館

『村長の沖周日記』（→複写入手済み。第一級の災害教訓遺産）

・トルコ：海軍博物館

→一部は『日本―トルコ友好展』から提供を